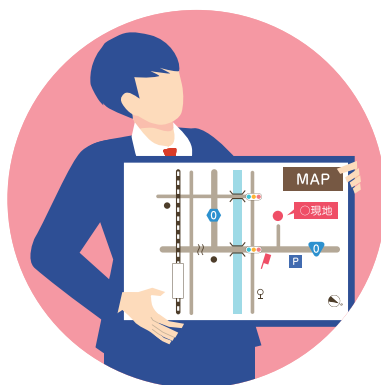


令和6年度 研究紀要



東京都奉仕・ボランティア教育研究会

目 次

研究紀要の発行にあたって	1
令和6年度東京都教育委員会研究推進団体 研究計画書	2
ボランティア活動に関する情報交換会	3
当日のチラシ（参考資料）	
《事例発表1》「ボランティア活動に関する情報交換会 事例報告」 東京都立東村山高等学校 橋本 明美 氏	
《事例発表2》「ボランティア同好会 実践報告」 東京都田無高等学校 福田 理恵 氏	
《事例発表3》「都内中学校・高等学校・高等部の教員とのボランティア活動に関する報告」 日野市社会福祉協議会 日野市ボランティアセンター 宮崎 雅也 氏	
《ボランティア活動に関する情報交換会 報告》	
《ボランティア活動に関する情報交換会 実施後アンケート》	
【情報提供】	
令和6年度東京都教育委員会研究推進団体 研究発表資料	17
東京都・東京都つながり創生財団	19
東京都奉仕・ボランティア教育研究会会員名簿	

研究紀要の発行にあたって

東京都立田園調布高等学校

校長 藤田 豊

東京都奉仕・ボランティア教育研究会は、平成23年度に発足し、高校生を中心とした、若者のボランティア活動等を推進するために、都立学校の教員を中心として、大学教員、社会福祉協議会、市民活動支援センター、青少年の活動を支援するNPO団体、関係行政機関など幅広い方々と共に、研究を進めています。

令和6年度は、昨年度夏に実施した「ボランティア活動に関する情報交換会」を土台にして、一步進めることを念頭に計画を立てました。具体的には、昨年度の情報交換会に参加し、その時のアドバイスを基に、学校で取り組みを進めた先生の実践報告（所属する高校でボランティア部の生徒が実際に地域に出て活動を始めるプロセスや、地元の社会福祉協議会や市役所と連携して生徒の活動機会を設定した）を行うとともに、ボランティアセンターの職員による、中学校や高等学校、特別支援学校高等部との連携の実例を挙げていただきました。これは、研修会を企画実施した私たちにとって、ありがたいことでした。

私は、先日、東京ボランティア・市民活動センターが主催する「ボランタリーフォーラム2025」のフィールドワークに参加し、一人で参加する高校生と出会いました。その高校生は、学校の総合的な探究の時間で多文化交流に関するグループに属しており、校内の掲示を見て「参加しようと思った。」と話してくれました。このような行動力のある高校生がいる一方、先が見えないと参加のハードルを感じてしまう高校生も数多くおります。また、同時に先生方も、先の見通しがないと一歩踏み出せないことも多くあります。



「ボランタリーフォーラム2025」

本研究会の企画によって、まず先生方が先の見通しをもつことができ、それを生徒に伝え、ちょっと参加してみよう！と、生徒が一歩踏み出すきっかけになってくれたらうれしいです。

現任校のことになってしまい申し訳ありませんが、令和6年12月、大田区社会福祉協議会のボランティアコーディネーターの職員の方々に田園調布高校へお越しいただきました。これは、2年生の生徒が私に、ボランティア活動をしたいのだけれども、どうすればいいですか？と尋ねられたことから始まりました。当初は、おおた地域共生ボランティアセンター（以下ボラセン）の紹介をして、「自分で行ってください。予め、電話をしておくので、安心して行けますよ。」と伝えたのですが、一般的に高校生が初めてボラセンに行くことはとてもハードルが高いです。そこで、ボラセンさんに状況をお伝えするとともに、本校においでいただいて、説明などできませんかとお願いをしました。大田区社会福祉協議会では、検討を重ね、12月13日にお越しいただくことになりました。本校教員の中には、会場の前でPRしてくださる先生もあり、結果的に10名程度来室し、そのうち2名は冬休みの活動を行いました。



「田園調布高校の取組」

大人も子供の未知の世界に踏み出すのは関心があっても勇気が必要です。本研究会の取り組みとして、若者や大人が一歩踏み出す機会を作れるように、研修会などの企画をする重要性を感じ、来年度には具体的に動き出そうと考えています。

令和6年度東京都教育委員会研究推進団体 研究計画書

作成日 令和6年5月24日(金)

研究推進団体名	088東京都奉仕・ボランティア教育研究会
研究のテーマ	生徒が主体的に行う社会に関わる活動について
研究の主な内容	・教員及び中間支援組織をつなぐ研修会・意見交換会を実施し、現状の活動を知る ・社会貢献活動による生徒への効果(変容等)をみとる ・コロナ後を見据えた新たな社会に関わる活動を探る

1 定期的な研修会や全国大会・関東大会(東京大会)等について御入力ください。(主な研修会等を10回以内で記入)

回	実施日	研究会時間	名 称・内 容 等	会 場	参加予定人数	指導主事等の派遣希望	派遣希望者	派遣者への依頼内容
1	5月30日 (木)	15時30分から 17時00分まで	・昨年度の振り返り ・今年度の活動方針	田園調布高校・オンライン	20人	不要		
2	7月3日 (水)	15時30分から 17時00分まで	今年度の活動に関する内容	都立学校(予定)	15人	不要		
3	8月1日 (木)	15時30分から 17時00分まで	今年度の活動に関する内容	都立学校(予定)	15人	不要		
4	8月9日 (金)	13時30分から 17時00分まで	ボランティア教育に関する研修 会兼情報交換会	東京ボランティア・市民活動 センター(予定)	40人	不要		
5	10月25日 (金)	15時30分から 17時00分まで	今年度の活動に関する内容 情報交換	田園調布高校・オンライン	10人	不要		
6	11月12日 (火)	15時30分から 17時00分まで	今年度の活動に関する内容 研究紀要に向けて	田園調布高校・オンライン	12人	不要		
7	12月12日 (木)	15時30分から 17時00分まで	今年度の活動に関する内容 研究紀要に向けて	田園調布高校・オンライン	10人	不要		
8	3月24日 (月)	時 分 時 分まで	次年度の活動に関する内容 研究紀要報告	オンライン	10人	不要		
9	月 日 ()	時 分 時 分まで			人			
10	月 日 ()	時 分 時 分まで			人			

・今年度の計画や希望等を御入力ください。(日時・会場が未定の場合、「未定」と御入力ください。「〇月頃」等でも結構です。)
・指導主事等の派遣及び挨拶等を希望する場合は、別途、各団体の担当指導主事等に連絡の上、派遣依頼の送付をお願いいたします。

2 定期的な研修会や全国大会・関東大会(東京大会)等について備考がありましたら御入力ください。

3 支援事業の利用予定(意向)について御入力ください。

内容	利用の有無	入稿日(時期)	特記事項 (必要に応じて、御入力ください)
1 団体が主催する全国大会等における紀要等への寄稿(※)	不要		
2 団体が発刊する紀要等への挨拶文の手配(※)	不要		
内容	利用の有無	予定日時等	特記事項 (必要に応じて、御入力ください)
3 研修センター研修室等貸出(※)	不要		
4 団体が企画する研究会等の案内の配布(※)	不要		
5 団体が企画する研究会等の案内のWEBページへの掲載(※)	利用予定	8月頃	
内容	利用の有無	掲載URL	
6 研究推進団体と教職員研修センターのWEBページのリンク(※)	利用予定	http://houshibora.com/	

4 意向調査

内容	意向	令和5年度実績	特記事項 (必要に応じて、御入力ください)
1 当センターWEBページ上への研究発表資料の掲載(紙上発表)(※) (予定)10月募集 11月資料提出 令和7年1月下旬に当センターWEBページ上に公開	応募する予定	応募した	
2 研究普及活動表彰に係る「賞賜金」の受取(※) (予定)10月通知 12月最終意向調査 令和7年2月付与決定通知 令和7年3月中旬に振込	受取を希望する予定	○	

計画書に関する 問い合わせ先 (作成者)	所属校(※)	東京都立赤羽北桜高等学校
	職・氏名(※)	主幹教諭・正木成昭
	電話番号(※)	03-5948-4390
	メールアドレス(※)	Naruaki_Masaki@member.metro.tokyo.jp

ボランティア活動に関する (第2弾) 情報交換会

主催：東京都奉仕・ボランティア教育研究会
共催：東京ボランティア・市民活動センター

令和6年8月9日 (金)

午後1時30分から午後4時30分まで



会場：東京ボランティア・市民活動センター

《都立学校・公立学校の先生方》

若手教員育成研修1年次（初任者）研修の課題別研修の対象となります。

東京都公立学校の先生方
研修出張でご参加できます

情報交換会タイムテーブル

- 13:30 挨拶・趣旨説明
- 13:40 事例報告
- 14:30 休憩
- 14:40 情報交換会
- 16:00 全体共有
- 16:20 まとめ

【このようなことが期待できます！】

- 生徒が社会と関わる活動を行うために必要なポイントを知りたい
- 社会貢献に関する部活動を立ち上げるためのヒントを知りたい
- ボランティアセンター等の中間支援機関の取組を知りたい

【8月9日（金）】東京都奉仕・ボランティア教育研究会主催研究協議会申し込みフォーム



【問合せ】 東京都立赤羽北桜高等学校 研究会事務局 正木 成昭
電話 03-5948-4390

今年度の研究会の研修の取組として、昨年度好評を受けた「ボランティア活動に関する情報交換会」の第2弾を実施した。50名を超える学校関係者、中間支援組織、行政の方の参加があった。前半は、学校関係者、中間支援組織による事例報告、後半は、情報交換会を行った。

今回、事例報告を行って頂いた学校関係者は、昨年度、本研修会に参加し、そこで得たことを学校で還元し、実際に社会貢献活動を推進している方をお招きしこの1年の取組として報告を頂いた。中間支援組織では、現在、東京ボランティア・市民活動センター事業にも関わり、小学校から高校までの連携の実績のあるボランティアセンター職員をお招きし報告頂いた。

後半は、7つのグループに分かれ、意見交換を行った。どのグループも、時間が足りなくなるほど活発な意見交換があり、今後のボランティア（社会貢献）活動のヒントにつながるものを得て頂けたのではないかと考えている。以下に、それぞれの報告を掲載する。

《事例発表1》

「ボランティア活動に関する情報交換会 事例報告」

東京都立東村山高等学校

橋本 明美 氏

本発表では、

- 1 東村山高校の取り組み
- 2 成果と課題
- 3 今後に向けて

の3つの項目に分けて報告を頂いた。

まず、1の「東村山高校の取り組み」では、現在当該校で実施している以下の取り組みの紹介を頂いた。夏季休業中に小学生の学習補助を行う「サマースクール」、東村山市が主催する「社会を明るくする運動」や「遊ぼうの会」への参加、近隣の中学生に技術指導を行う部活動ボランティア、生徒が防災士の資格を取得し参加した東京都・東村山市合同総合防災訓練など、生徒が主体となった取り組みだけではなく、東京都や東村山市が主催したイベントや近隣の小中学校との交流など、多岐にわたるものであった。

次に、2の「成果と課題」について、参加した生徒の声（子どもたちや地域の方とお話しできてよい経験になった／すごく緊張して疲れたけど、またやりたい／「ありがとう」と言われて嬉しかった）や依頼者の声（採点を手伝ってくれたおかげで、いつも以上に丁寧に指導できました／市の取り組みをPRすることができました／高校生と練習ができて刺激になりました等）の紹介とともに、サマースクールの依頼校が昨年に比べて増加し、また部活動ボランティアでは継続した依頼があるように、生徒の頑張りが評価につながったことが明確になった。一方、ある生徒の「ボランティアは誰が得をするのか？」「何があるか知りたい 知る機会があれば、やりたい人がいるのでは？」という発言から、自分なりの目的を持って活動していく課題や参加者を広げる必要性が浮き彫りになった。

最後に、「今後に向けて」として、生徒が何を求めているのかを把握すること、生徒がボランティア等を知る機会を増やすこと、生徒への案内の工夫として地域のボランティアセンターと連携したり、生徒にあったボランティアと一緒に検討するなどの提言があった。

「ボランティア同好会 実践報告」

東京都立田無高等学校

福田 理恵 氏

本発表では、

- 1 ボランティア同好会を設立するまで
- 2 ボランティア同好会の活動
- 3 今後の課題・困っていること

の3つの項目に分けて報告を頂いた。

まず、1の「ボランティア同好会を設立するまで」では、昨年4月にある女子生徒からの申し出でボランティア同好会の設立に向けて動き出すも様々な事情があり停滞する中で、8月に「ボランティア活動に関する情報交換会」に参加して多くの教員・関係者からアドバイスをもらい、再び女子生徒とともに動き出し、翌1月に無事設立に至った経緯についての紹介を頂いた。設立に向けた女子生徒の想いと福田氏の努力が実を結ぶことになり、参加者から大きな拍手が起こった。

次に、2の「ボランティア同好会の活動」では、今年の4月から8月までの活動に関する紹介を頂いた。4月は、福田氏のアドバイスのもと会員募集のためのポスター作成を行い、新たに12名の新メンバーを迎えることになった。5月には、災害用トイレや備蓄品を作成し、6月にはメンバーでの話し合いや校内外清掃を行った。7月には、田無特別支援学校夏祭りボランティア・東伏見保育園夏祭りボランティアに参加、8月にはアスクたなし保育園夏祭りボランティア・下宿自治会夏祭りボランティアに参加した。9月・10月には西東京市民文化祭へのボランティア参加を計画している。

最後に、3の「今後の課題・困っていること」として、福田氏が育児中の身として生徒の「やりたい！」想いにどこまで応えるか、他の部活動との連携について（吹奏楽部や演劇部とのコラボレーションの企画）、またボランティア同好会以外の生徒に参加してもらうためには何が必要か、といった課題を報告し終了した。



<事例報告 1>



<事例報告 2>

「都内中学校・高等学校・高等部の教員とのボランティア活動に関する報告」

日野市社会福祉協議会 日野市ボランティアセンター

宮崎 雅也 氏

本発表では、「みんなの幸せ」をキーワードに、日野市社会福祉協議会及び日野市ボランティアセンターが日々行っている活動やこれまでの実践事例について報告を頂いた。

まず、社会福祉協議会及びボランティアセンターは「学校教育の中で子どもと一緒に社会を変える」役割を担っており、学習指導要領（総合）との位置付けの中で、どのように活動していくのか、どうやって教員に仕掛けていくのか、といった内容を事例とともに紹介した。

ある事例では、活動に移す前に生徒全員に「みんなの幸せは一人ひとり違うが誰もが幸せになりたいと思っている」という想いを伝え、それを確認した上で学習を進めていく。その想いが伝わり、活動に軸が生まれ、生徒の中で目的が明確化することである。

また、別の事例として報告があった「福祉教育ハートフルプロジェクト」は、時間をかけて教員とともに単元を構築するところから開始する。年間を通して教員とともに学習を進めていき、生徒の「知る・考える・考えたことを行動に移す」ことを主眼に置くことで、生徒の責任感が増し、自覚を促すことが可能となる。また、同プロジェクトのアンケート結果から、「教員はコーディネーターがいれば実施が容易である」ことがわかり、これまで以上に学校との連携を意識した活動を行っている。

これまで学校と連携したその他の実践事例として、募金・フードドライブ（中学校）、高校生が探究活動を終えた後も「またやりたい」との想いを叶えるために創設した「持続可能な日野の未来を創る高校生チーム」（高校）などが挙げた。「通学する生徒にもっと日野を知ってもらいたい」という教員の想いとともに立ち上がったプロジェクトでは、生徒自身が日野をPRするコマーシャルを制作するなど、その活動一つひとつが生徒や教員の想いを具現化したものであり、大変参考にある報告であった。



《情報交換会》

【Aグループ】

高等学校教員 3名

中間支援組織 2名

行政職員 1名

困っていること、知りたいこと、悩みについて協議をした。

①分掌は、生活指導部・生徒会担当である。例年、生徒会がボランティアをすることになっているが、生徒にはやる気が見られず、「なんでやるの」と言われる。「やろうよ」と声をかけている。教員自身は、他にもたくさんの業務を同時に抱えており、生徒会指導に力を入れる時間が持てないでいる。運動部主顧問の引率とボランティア活動引率が、日曜日にあり、教員の負担感が大きい。

生徒会生徒が、主体的にボランティア活動をするためにはどうしたらよいか。

解決策としては、まず、一人で悩まず、先輩教員に相談し複数で担当するチーム作りをする。次に、教員間でのボランティア活動をする意義等の共通理解を図るために、管理職を通して、地域自治会との協議を持つてはどうか。自治会が、年間を通して、高校生に、いつ頃、何を求めているかを知ることが大切であると思う。さらに、地域の社会福祉協議会、ボランティア・市民（区民）活動センターに連絡を取り、相談してみる。校内体制が整ったところで、担当教員は、生徒会生徒と、社会福祉協議会、ボランティア・市民（区民）活動センターを訪問し、ボランティア活動について学ぶ。担当教員の引率は、顔合わせと第1回でだけで、第2回目以降は、生徒会生徒でも可であるとのことである。生徒にボランティアについてより知るきっかけを与え、生徒自身が主体的に活動できるようにしていく。

生徒会がボランティア担当と決めてしまわなくて良いのでは。例えば、軽音楽部主顧問として、児童館クリスマスイベントに参加してみる。部員は、ボランティア活動ができ、発表の場も与えられる。一番やりたいことでボランティア活動をすると、楽しいと感じられる。ボランティアは、苦しいものではなくて、楽しいものだと思う。

※【一人で悩まず、中間支援組織に相談しよう。】

②イベントを開催するが、単発で終わってしまい継続していくことが難しい。継続させるためにはどうしたらよいか。

まず、ボランティアのイベントが単発でも良しと、考えてはどうか。

生徒が書く振り返りアンケートの中で、好感度が高ければ、主催者側は、今後ボランティア活動を登録するか否かを打診し、継続する意志のある生徒を集めていくことができる。

生徒も教員も、どんなイベントがいつ実施されているのかを知らないことが多い。社会福祉協議会によっては、毎月イベントの発信をホームページで行っている。情報発信の工夫が大事である。Teams 上にアイコンを作り、Teams から発信する等、社会福祉協議会と連携し工夫していく。

※【ボランティア・イベントの情報発信を進めよう】

③ボランティア活動をこれから進めていく学校とすでに取り組んでいる学校でのイベント内容について

「令和6年度 ボランティア文化定着に向けたイベント・セミナー 東京都都民生活部」の中で、2月24日開催の「つながる！！Tokyo ボランティアフェスタ 2025」は、ボランティア活動において、「はじめの一步を後押する」イベントであり、連携イベント、応援セミナーは、「深掘りのイベント」である。

また、全国の高校生が集う「高校生ボランティア・アワード 2024 大会」についての紹介があった。ボランティア活動の取組みを発表できる場があり、頑張っているボランティア活動をしている生徒にとって、励みになると思った。

※【生徒をイベントに連れて行こう】

④ボランティア活動におけるポイント制について

ある単位制の高校では、ポイント制を導入しており、単位取得に向けて、生徒は、主体的・積極的にボランティア活動に参加している。

全日制普通科の学校でのポイントリザーブ制の活用は難しいのでは。

全日制普通科に勤務した際、奉仕体験学習において、1 時間＝1 ポイントのポイント制を実施していた。

奉仕体験活動では、各教員が、講座を持ち、校内もしくは校外の施設・機関での体験学習やボランティアに参加した。

※【他校の実践例を参考にしよう】

☆多今回の情報交換会では、ボランティア活動を推進していくための基盤づくりについて学びました。また、学校現場だけでは知りえない情報を中間支援組織や行政職員から教えていただきました。

【B グループ】

高等学校教員 3 名

中間支援組織 1 名

行政・その他 2 名

B グループの主な協議内容

＊悩みごと、相談ごとなど

- ・教員からは、特定の活動に固定化されており、活動の幅を広げるヒントが欲しい。特定の活動では、生徒が集まるが、活動のレベルを上げる（お祭り等）と生徒がドタキャンする課題がある。どのようにしたら社会貢献活動に生徒を参加させることができるか。学校の特徴として、1 回のボランティア活動を行ったことで調査書等に記載してもらえるのかといった声もあり、その対応策を検討しながら進めている。
- ・中間支援組織からは、夏の体験ボランティア活動に参加する生徒のモチベーションの差を感じている。
- ・行政からは、運営しているサイトの紹介、中高生向けボランティア活動に関する情報発信を行っているが、多くの学校に知ってもらうための方策を知りたい。

＊上記の内容をふまえて。。

- ・例えば清掃活動を行う場合の工夫として、ある場所で清掃活動を行った際に、ごみの種類の分析を行い、次の活動で、どのようになっているかを比較する。ポイ捨てが多い場合には、ポイ捨て禁止などの啓発のポスターを作り行政等と協力し、貼り出す提案を行うことが挙げられた。生徒に成果物を与えることで成長につながる。
- ・上級学校進学の際に、調査書等にボランティア経験を書く生徒がいて、1 回の清掃活動だけで書いて持ってきたり、保護者から 1 回の活動で調査書にボランティア活動と書けますよね？といった声もあ

るため、5回の清掃活動を行うことで調査書に書くといったことを取り決めている学校の例もあった。学校の生徒の実態に合わせた取り組みとのことで、生徒や保護者にとっても明確で分かりやすいのではないかといった意見が多数あった。社会貢献活動の目的は、例え進路活動のためであっても、そのことがきっかけで、物事の考え方が変わる期待もある。きっかけはどんなことであっても社会貢献の扉は開けておくことが大切であろうといった見方が多かった。

- ・夏の体験ボランティアでは、学校の宿題、進路活動のためといった自主的な参加ではない生徒もいることから、どのような分野に興味があるかなどの問いに対し、わからないといった回答もあるため、活動先を決める際に、進まないといった状況もあるとのことであった。これに対し、中間支援組織だけではなく、学校の教員も関わりながら、その先の活動につなげていく“連携”も大切ではないかという意見があった。そう考えると、学校と中間支援組織の密な連携が、社会貢献活動では必要という考えを共有した。
- ・ボランティア活動は、学校でできる活動もある。切手を集めて寄付をする、縫物を行い寄付をする、雑巾を縫って寄付をするなどといった活動もあり実態に合わせた対応もできるといった紹介もあった。その際には、地元の社会福祉協議会やボランティアセンターと連携を図ることで活動の幅が広がるものとする。
- ・本グループに参加した中間支援組織では、学校から中間支援組織に出前授業等の依頼は多くあるとのことであった。また、施設等から学校に対しての依頼というのは少ないようで、学校と施設のニーズがつながれば、連携も進んでいくのではないかというアドバイスがあった。
- ・学校から、ボランティア活動を行わない生徒等をどう巻き込んでいくかという話題もあがった。都立学校では、選択制にはなるが、教科「人間と社会」の授業の中の体験学習で社会貢献活動を行っているところもある。これにより、社会貢献活動を考える機会にもなる一方、他教科等の連携などでこのような活動を紹介していくといった考え方もあるのではないかという声もあった。また、部活動間の交流で、モチベーションを上げるきっかけにもなるのではないかといった意見もあった。
- ・生徒が参画する活動こそ、指導要領「特別活動」に示されている目標を達成できるのではないかといった実践報告もあった。そのためには、予算の確保という課題があり、そのための予算をどうねん出するかといったことが課題として挙げられた。行政職員からは、1つの方策として地域連携、特に学校がある自治会や町会とのつながりのヒントを頂いた。自治会・町会は助成金を申請しているところもあり、自治会とのコラボで、学校側が叶える企画等の予算として支出ができるのではないかといったものである。自治会や町会の高齢化が指摘される中で、若い力が自治会・町会に入ること、地域の活性化にもつながっていくのではないかという考え方が共有できた。

【Cグループ】

高等学校教員 2名
中間支援組織 3名
行政系職員 1名

ボランティア教育を勤務校でどのように取り組んでいるか、高等学校教員から情報提供を行った。「人間と社会」や「総合的な探究の時間」を活用して取り組ませている、との報告があった。高等学校教員1名からボランティア活動を単位認定に活用している事例の報告もあった。

中間支援組織からは、各地域で高校生がボランティアにどのように取り組んでいるかの事例報告があり、グループ編成に高校教員がいたこともあってか、高校生がボランティアに対して、どのようにアプローチすれば有効かということを探している、とも教えてくれた。

行政系職員からは様々なボランティア活動を紹介する、東京ボランティアレガシーネットワーク(TVLN) でぜひ各校、各地域の取り組みをピックアップしたいという声をいただいた。

高校教員の勤務校では外国にルーツをもつ生徒も多く、登校が不安定な生徒が多いなど、ボランティア教育を充実させるための課題が多く、学校のみならず中間支援組織や行政と連携した指導が必要なることを確認できた。

【Dグループ】

高等学校教員 3名

中間支援組織 2名

行政系職員 1名

最初に自己紹介を兼ねて、各自が今回参加した理由と困っていることや知りたいことについて付箋に記入し発表しました。

高等学校教員からは「生徒指導部に所属しており、ボランティアに触れるため」という参加理由や、「障がいを持つ子どもたちに適したボランティアについて知りたい」「公共」の授業でボランティアの意義をどう伝えればいいのか」などの質問がありました。「障がいを持つ子どもたちに適したボランティアについて知りたい」については中間支援組織の方から「そうしたボランティアを紹介できるので、まずは近隣の中間支援組織に相談してみてもどうだろうか」との助言がありました。また「公共」の授業でボランティアの意義をどう伝えればいいのか」については「公共」の授業のみで意義を伝えようとすると時間が足りず難しいのではないだろうか、課外活動等でのボランティア活動の実践を交えると意義が伝わりやすいのでは」との助言がありました。

中間支援組織の方からは学校に聞きたいこととして「授業等でのボランティア参加がボランティア本来の趣旨と違っている件について」「学校でのボランティアについての単発の講座後どのように実際のボランティア活動に結びつけられればいいのか」「ボランティアの申し込みについて公立学校の方が少ないのはなぜか（各教育委員会とはつながっているのに）」という発言がありました。「授業等でのボランティア参加がボランティア本来の趣旨と違っている件について」については、学校で本来の趣旨を振り返りによってきちんと学ぶことによって「ボランティアをすると単位取得や資格に有利」と考える人が少なくなるのではとの話がありました。「学校でのボランティアについての単発の講座後どのように実際のボランティア活動に結びつけられればいいのか」については、ボランティア活動を行いたいと思う生徒がいても学校の先生はボランティア活動に精通している訳ではない。中間支援組織の側からボランティア活動についての情報提供を継続的に行うことで、学校の先生がボランティア活動を紹介できるようになるのでは、という話がありました。関連して「ボランティアの申し込みについて公立学校の方が少ないのはなぜか」についても、地域特性もあるが中間支援組織の側からの積極的な働きかけが重要であるとの話がありました。

また行政系職員の方からは「若者の活動にどうつなげるか、どういった支援がほしいか」という発言がありました。生徒のボランティア活動をサポートするためにはまず学校と中間支援組織の連携が重要

だが現状では連携が不十分であって、学校がどのような支援を必要としているのかを知るためにも中間支援組織や行政が積極的に行動を起こすことが重要という話がありました。加えて、中間支援組織の方からお話があった「地域資源の開拓」については、学校・中間支援組織と行政が協働で「地域資源の開拓」を行うことで、連携を醸成できるのではないだろうか、そのために「学校に出向く講座の質と講師の考え（社協内でも違いを考えないと...）」のように中間支援組織内で学校との連携をどうするのかについて再度検討することが必要であるとの話がありました。

全体を通して、生徒・若者のボランティア活動をサポートするためには、学校・中間支援組織・行政の三者が、困りごとや悩みごとを共有していくことが必要なんだなということがそれぞれの立場から理解できたと考えられます。

【Eグループ】

高等学校教員 2名
中間支援組織 2名
行政・その他 1名

- ・高等学校教員と中間支援組織（社会福祉協議会）職員から、目下、生徒の送り出し、受け入れにかかる現状と課題について情報共有と意見交換がなされた。
- ・教科「人間と社会」に伴う社会体験活動が実施されているはずだが、参加した高校からはまったく校外に出る活動は実施されていない様子が紹介された。
- ・「総合的な探究の時間」等で、校外活動を伴う社会体験活動、ボランティア活動を相談する窓口がどこにあるのかはもとより、同僚教員にも相談しづらく、取り付く島もないという状況であると、高校側から吐露された。
- ・社会福祉協議会からは、ボランティア活動に対する生徒・学生のモチベーションが、調査書や「ガクチカ」のエピソードづくりであることが多く、そのような生徒・学生に社会課題に応じるボランティア活動の意義をどのように伝え、活動を継続してもらえるかが、悩ましいところだとの現状が紹介された。
- ・ボランティア活動を含め、社会体験活動の展開についての可能性について意見交換がなされた。
- ・きょうの事例報告の中でも、ボランティア部だけが生徒のボランティア活動の受け皿ではなく、教科や他の部活動と結びついた取り組みが報告されていた。施設での受け入れに関しては、吹奏楽部や軽音楽部、合唱部、落語部などは、児童施設や高齢者施設でも、練習がてら演奏披露が可能であり、気軽に来てほしいとのニーズがある。運動部では、子どもたちと一緒に体を動かすなどの活動が可能だと思う。
- ・コンクールや大会に集中している部活動こそ、レギュラーになれなかった部員の「セカンドキャリア」として、地域でのボランティア活動に取り組まれるのがよいのではないか。
- ・施設でのボランティア受け入れ情報は、社会福祉協議会でもニーズ把握をしており、引き合わせが可能である。
- ・施設の通常活動の支援を行うボランティアニーズもあるが、施設職員の頭を悩ませているのは、利用者のレクリエーション活動であり、そこにも、特技を持った方（音楽、芸術、スポーツ、演芸など）のニーズがあることは知られていないかもしれない。

【F グループ】

高等学校教員 2名
中間支援組織 3名
行政・その他 2名

F グループの主な協議内容

* 悩みごと、相談ごとなど

- ・教員からは、生徒に何かやらせてみたいが、特にやりたいことが決まっていない場合に、地域とどうつながればよいかという悩みが出た。それに対し、素直にそのまま社協やボランティアセンター、町内会に状況を伝えたうえで活動につながったという話があった。また、生徒自身が活動を見つけてくる場合もあるとのこと。
- ・教員、中間支援共通の悩みでもあるのが、どう他の教員に関心を持ってもらおうかというのがあった。感度の高い先生を見つける、出会えるのはめぐり合わせもあるが、アプローチを続けることが大事である。
- ・中間支援や行政が発信する情報の学校への届き方について、学校内にボランティア担当という先生はおらず、情報は管理職から必ず共有されるとは限らない状況だとわかった。顔が見える人からの情報のほうが届きやすいため、日ごろからの関係づくりが必要である。また、学生の活動でもあるため、顔の見える関係からの情報のほうが、安心・安全な活動につながり生徒が活動しやすいとのことであった。
- ・高校生でも「ガクチカ」としてボランティア活動に取り組む傾向もあり、進路指導部に情報チラシを送り、大学・専門学校などの説明会をする進路イベントの一角に中間支援がブースを出してはどうか、といったアドバイスがあった。
- ・都立高校で実施している人間と社会の授業や、総合的な探究の授業の現状なども中間支援から教員に質問させていただいた。内容によっては、教育庁が行っている都立高校生を対象とした「インクルーシブ体験」プログラムもできそうだ。また、通信制高校の場合、広い地域から通ってきているため、中間支援からすると、キャンパスが自分の地域でなくても、アプローチできるチャンスがあるかもしれない。
- ・夏休みの体験ボランティアとして、校内でできるプログラム、外部でできるプログラムをそれぞれ5つ程度用意して案内し、グーグルフォームで申込みを受け付けて活動につなげているという学校があった。学生自身が外部の活動を見つけて、参加するのはハードルが高いため、学校から提供しているとのことであった。
- ・教員から社会福祉協議会にアプローチを迷った場合、地域福祉活動計画を見てみると、その社協がどのような分野に力をいれようとしているかがわかる。子ども・若者、防災、居場所づくりなど、学校と一緒に取り組める活動を切り口に話を進めやすいのではないかと。
- ・グループ内で、区市町村社協の職員と、当該地区にある学校の教員が初めて顔を合わせてつながることができた。

【Gグループ】

高等学校教員 2名

中間支援組織 4名

Gグループの主な協議内容

*悩みごと、相談ごとなど

- ・教員より、運動部のチームビルディングの一環で、学校周辺の清掃活動を実施している、もっと地域に愛されるチームとなるための方策に関するご相談があった。また同時に校外の方との関わる機会が文化祭くらいしかなく、なるべく増やしていきたいが、どうしたら良いか、とのこと。
- ・そもそも、「福祉教育」の目的は何か？高校としてどのようなことに取り組むことが必要なのか？、との質問が投げかけられた。
- ・「総合的な探求」「人間と社会」には、テキストがない。そのため、生徒のボランティアマインドを育むために何か良いヒントはないかが知りたい。
- ・予算がかけられない取り組みへの対応は、どのように工夫を行えばよいか。
- ・外国人または外国ルーツの生徒へのサポートが必要と考えているが、どのように実施しているか。
- ・中間支援組織からは、夏の体験ボランティアでは、公立高校の生徒が少なく、より多くの生徒の皆さんにご参加いただきたいと考えている。生徒の皆さんにボランティア募集案内を行うにあたり、学校ではどなたが窓口となるのか？、また、どのようにボランティア情報を届けると効果的か？を教えてほしい、とのご相談があった。

*上記の内容をふまえて

- ・地域に愛されるチームを目指していくことは生徒のモチベーションを上げるうえでも大切なこと。町会・自治会は地域の一斉清掃日を設けていたりする。町会・自治会からのよくあるご相談として、清掃活動に若い世代の参加がほとんどなく、重い物の移動が大変だ、という話も耳にする。そのため、ぜひ、町会・自治会とつながって連携してみるのはいかがでしょうか。また、町会・自治会とのつながりを持つ際は、学校と町会・自治会の両者を理解する、地域のボランティアセンターに紹介していただくことで、お互いの想いが共有しやすくなるのではないかと、とのアドバイスがあった。
- ・福祉教育の最大の目的は、「みんなの幸せ」を学ぶことである。生徒たちがこれまで関わってきたことのない方に関しては、例えば、精神障害者や LGBTQ など、日常的にいるはずだが、「見えていない人達」となってしまうている。授業の一環であれば、出会う機会となる上、当事者からお話を聞く機会が得られ、生徒の視野が広がるきっかけになる旨の話があった。
- ・実は子どもの頃から、知らず知らずのうちにボランティアに触れる機会が得られていることがある。しかしながら、それに気づいていないことが多いのではないかと。それは、ボランティアは何か特別なものという見方や意識がまだあるからかもしれない。身近なところでは、小学校で行われているサッカークラブのコーチや、野球、バスケなどは、ボランティア的に行っていることもある。スポーツに限らず、そういう地域の面白い大人やカッコいい大人たちから学ぶことが多くある。そういう意味では、生徒たちを野（地域）に放つことも必要ではないかと。様々な地域の活動に触れることで、誰かの役に立つ経験をし、そこで喜びが得られ、自己肯定感が高まることにつながる。ボランティアマインドは、うれしかったという経験や、自分自身が輝ける場があることから育まれることがあるとの話があった。

- ・外国ルーツの生徒の皆さんへのサポートに関しては、学校によっては、多文化共生部という分掌があるとのことだが、他地域ではあるが、神奈川県では、認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわが県教委と協働で高校進学ガイダンスの開催や、翻訳資料の提供などを実施している。また、多文化教育コーディネーターを公立高校に派遣するほか、外国人教育相談や、キャリア支援などにも取り組んでいることの共有があった。また、この事例のように、専門的に取り組む NPO との連携も、サポートの 1 つの方法であるとの紹介があった。
- ・学校にボランティア募集を行う際は、先生のフィールドである、教科と絡めた活動にすると参加しやすいことがある。また、教育委員会経由で、保護者向けのアプリを活用して情報を流してもらえる場合もあるので、相談してみると良いかもしれないとのお話があった。
- ・テキストがない取組に関しては、ボランティア活動のメニューがあると先生方も取り組みやすいかもしれないが、それよりも、オーダーメイドでご紹介できた方が、その学校の雰囲気や生徒たちに合わせた取組ができる。そのため、直接、先生方と話し合いながら、内容を考えていきたい。ボランティアセンターとしても先生方と一緒に悩み、ともに考えていきたいとの思いを共有いただいた。



中高生 部活動 チームビルディング 生徒指導部 扱うため 障害者 福祉 学校外
 清掃ボラ止ま 社会 ヒント 教育 課題 初任者というこ 現状 気がしたため ボランティア部 紹介 初任者研修
 ボランティア活動状況

- ・研修、部活動、分掌業務の一環として 5 名
- ・ボランティアや、社会貢献活動の知見を深めるため 10 名
- ・学校現場の現状を知る、連携先を開拓する 5 名

● 大変参考になった	18
● ある程度参考になった	2
● あまり参考にならなかった	0
● 参考にならなかった	0



● 大変参考になった	18
● ある程度参考になった	2
● あまり参考にならなかった	0
● 参考にならなかった	0



○情報交換会について

● 大変参考になった	20
● ある程度参考になった	0
● あまり参考にならなかった	0
● 参考にならなかった	0



○本研修会の感想等

- ・たくさんの良いお話、活用できそうな情報を聞かせていただきました、感謝申し上げます。
- ・今回、いろんな自治体に所属されている方と話を聞いて、もっと身近にできることがあると感じました。また、参加させて頂きたいです。
- ・人との繋がりが増えたことが、とても良かったです。貴重な機会でした。
- ・福祉にまつわる学校・支援組織・行政等のリアルな取り組みを知ることができて大変ためになった。私も生徒指導の中で、福祉に関する活動を行えるよう積極的に働きかけていきたいと思った。
- ・ボランティア活動を通して、生徒にどのようなことを学んでほしいかなど、先生の視点からの意見を聞くことができ、とても勉強になりました。また、区内区外問わず、つながりを築いていくことが大切だと感じました。ありがとうございました。
- ・実際に学校の先生が持っている課題が知れ、事業運営の参考になりました。
- ・教員、社会福祉協議会、行政で関心のある方々が集まる会は貴重な情報交換の場でした。ありがとうございました。
- ・教育機関の現状がわかり、様々な人と繋がる貴重な機会でした。ありがとうございました。聴きたいことも聞けて、とても有意義な時間となりました。
- ・今まで未知だった高校の先生とつながりが持てて、とても良かったです。
- ・ボランティア部の活動や地域と連携した取組事例等についてお話を伺うことができ、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・先生方の取り組み、生徒の様子、課題などが伺えて、それだけでも充分ありがたかったです。高校生との関わりが希薄だったので、関わるヒントをいただきました。
- ・地域を問わず、多くの先生方や社協、都の方とつながる機会をいただき心より感謝しています。

本研修会を終え、アンケートの回答数でみると、参加してくださった方全員が満足する会となったことは一つの成果である。社会貢献活動を進めていくうえで、学校と中間支援組織等、外部との連携は必要不可欠であると考え。コロナ過を経験し、今まで連携のあった教育活動が止まったことや教職員の異動の関係で、今もまだ止まったままの学校もあると聞いている。そのような課題を解決すべく、多くの学校関係者や、その学校のある中間支援組織のつながりがもつきっかけづくりを研究会として推進していきたい。

次年度以降の開催を求める声も大きいことから、本研修会のその後を調査しながら、次年度に向けて計画的にプログラムを立てていきたい。

【令和6年度東京都教育委員会研究推進団体 東京都奉仕・ボランティア教育研究会】

研究主題 「生徒が主体的に行う社会に関わる活動」について

I 団体の概要

本研究会は、平成23年度に教科・科目「奉仕」における授業実践と、「社会の一員の自覚」と「規範意識と社会貢献意識の醸成」等を目的に発足し、12年目を迎えた。

これまで「ボランティア教育」に関心をもつ教育者や、ボランティア関係団体の方々が集まる研究会として活動している。

令和4年に開催された第46回全国高等学校総合文化祭東京大会「ボランティア部門」の委員として研究会が関わり、その他にも、教員や外部中間支援組織を対象とした研修会も実施している。

II 研究の目的

昨年度に続き、研究主題「生徒が主体的に行う社会に関わる活動」について、コロナ禍で、ボランティア活動、社会貢献活動の在り方も変わりつつあるという報告を受け、コロナ禍前の状況に戻せるよう教員及び中間支援組織をつなげる意見交換会を開催しニーズを図る。

コロナ禍以降、教科「人間と社会」における体験学習の在り方が変わっているという声を受け、体験学習の実態を調査するべく大学における関係機関と共同で研究を深めていく。

探究活動の視点に合わせ、社会貢献活動を行うことで、生徒の変容がどのように変わっていくか、発達段階に応じてどのような社会貢献活動が効果的かを考えていく。

III 研究の方法

- ①教員の他に、社会福祉協議会等の中間支援組織、社会貢献活動にかかわりのあるNPO団体等に声をかけを行い、本研究会の研究協議会（月例会）等に関わってもらいながら研究を深める。
- ②定期的な研究協議会（月例会）を対面の他に、オンラインでの開催も視野に入れ、ハイブリッド形式で実施する。
- ③東京ボランティアレガシーネットワーク（以下、VLN）（東京都生活文化スポーツ局都民生活部、東京都つながり創生財団）との連携を深め、本研究会の研修内容等を発信していく。
- ④教員を対象とした研修会（意見交換会）を計画し、教員のみならず、中間支援組織とのつながりをもてる機会を設定し、ねらいに沿った研修内容を推進していく。
- ⑤大学関係機関有識者と連携を図り、生徒の変容等に関する調査
 - ・研究の方向性を探る。
- ⑥研究主題に沿った内容を定期的に進めていく。

IV 研究の内容

- ①コロナ禍で生まれた新たな社会に関わる活動を探る。
- ②教員、中間支援組織を対象とした研修会（情報交換会）を企画
 - ・運営しそれぞれの課題等の情報を得て解決の方向性を探る。
- ③社会貢献活動による生徒への効果（変容等）をみとる。
- ④コロナ後を見据えた新たな社会に関わる活動を探る。

V
实践事例 (研修会)

○8月9日(金) 実施

「ボランティア活動」に関する情報交換会

对象：教员、中间支援组织等

参加者：53名（昨年度より11名増）

都立・私立高等学校の先生や大学の先生、社会福祉協議会・ボランティアセンター、行政の中間支援組織、行政職員も御参加いただいた。

昨年度参加いただいた先生から、高等学校の実践事例を紹介いただき、小学校から高等学校まで連携を図りながら社会貢献活動を推進しているボランティアセンターの実践事例を紹介いただいた。

後半の意見交換会では、教員、中間支援組織、行政で7つのグループに分かれ、それぞれの視点での悩みや解決に向けたヒントなど話し合う時間とした。どのグループも活発な話し合いがあった。

実施後のアンケートでは回答を頂いた方すべてが、研修会について肯定的な回答をいただくとともに、次年度以降も本研修会の開催を期待する声もあった。



TVACニュースより引用 (東京ボランティア・市民活動センター)

VI 研究の成果と課題

△成果▽

①教員のみならず、大学有識者、行政（都）、中間支援組織、NPO法人等、様々な立場の方が集う場であるため、多くの視点で物事を進めていくことができ研修会も満足いくものができた。

②生徒の変容の調査に向け、ある高等学校の部活動における調査・研究が実施できた。1年かけて追跡を図っているよう、関係機関との連携を進めていく。

③対面・ハイブリッドの月例会の開催は有効であった。

△ 課 題 △

①本研究会の教員の人数不足が挙げられる。研究会での案内やWebでの情報発信を行っているところではあるが、今後の人材確保が課題として挙げられる。

②これからの社会貢献活動の在り方を、しっかりと模索し、時代に即した研究を進めていく。

＜令和6年度連絡先＞

団体名		東京都奉仕・ボランティア教育研究会	
代表者	所属	東京都立田園調布高等学校	
	職 氏名	校長 藤田 豊	
	連絡先	03-3750-4346	
事務局	所属	東京都立赤羽北桜高等学校	
	職 氏名	主幹教諭 正木 成昭	
	連絡先	03-5948-4390	
団体ホームページ		URL	二次元コード
		http://www.houshibora.com/ 	

都民のボランティア活動等に関する実態調査

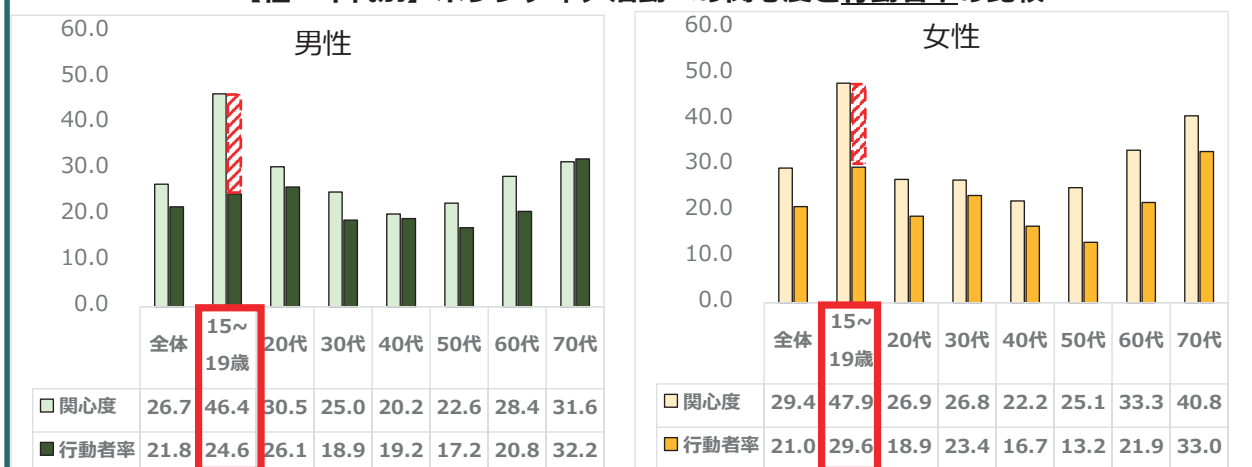
調査結果の詳細はこちらから▶



R6 調査結果(抜粋)

直近1年間にボランティア活動した人の割合

【性・年代別】ボランティア活動への関心度と行動者率の比較



- 10代は男女とも約5割がボランティア活動に関心があると回答。
- 10代のボランティア活動行動者率は、ほかの年代と比べると高い。

(図表の赤い斜線部分について)

ボランティア活動への関心度を行動に結びつけることにより、
ボランティア活動をさらに多くの生徒に広げていける可能性がある。

ボランティア文化の定着を図るため、セミナーやイベントなど様々な取組を展開しています。

(取組例)

つながる!!Tokyoボランティアフェスタ2025

日 程：2025年2月24日（月・振休） 会 場：東京国際フォーラム
内 容：



● ステージイベント

お笑い芸人によるボランティアに関連するコント・漫才で競う「ボラ-1 グランプリ」、タレントやボーイズグループなどが参加する体験講座など、ボランティアの魅力が詰まったプログラムを実施。

● 交流イベント

手話や、やさしい日本語のワークショップのほか、様々なボランティア団体や企業がブースを出展。来場者の皆様にボランティアや社会貢献活動の魅力や楽しさをご紹介いただきました。また、たくさんの学生ボランティアグループ等にもご協力いただきました。

〈出展ブース〉 ※太字は学生団体のブース

東京都つながり創生財団、日本財団ボランティアセンター、**学生団体おりがみ**、NPO団体MURP、Studio.mofe、**淑徳高等学校 社会福祉部**、TVAC (VIOLET!!)、オンボラ・コミnet、FC東京・スポーツボランティア、日本航空株式会社、オリンパス株式会社、東京都（生活文化スポーツ局国際スポーツ事業部、東京消防庁）

● 運営サポーター（ボランティア）

10名の運営サポーターとともにイベントを盛り上げました。

〈活動内容〉

プログラム配布、アンケート収集、ガラポン抽選会対応



東京都と(公財)東京都つながり創生財団は、東京2020大会レガシーを活かしながら、
ボランティアの活動継続やボランティア活動の裾野拡大に取り組んでいます。

東京ボランティアレガシーネットワーク(VLN)とは

令和3年11月にオープンした、**東京都の公式ボランティアポータルサイト**。東京都と(公財)東京都つながり創生財団が運営しています。
福祉・スポーツ・多文化共生等多様なボランティア情報を発信し、中高生含め、**様々なボランティア活動を応援**していきます。



<https://www.tokyo-vln.jp/>

団体ユーザー【募集団体】

- 147の団体・組織(2025年1月末時点)
- TVAC・日本財団ボラセンのほか、区市ボラセン、国際交流協会、国際協力NGO、都庁各局、区市町村、民間ボランティアグループ等、様々な分野の団体が登録し情報を発信。

個人ユーザー【活動希望者】

- 13,103人(2025年1月末時点)
- 東京2020大会関連ボランティア経験者をはじめ、スポーツや国際分野、公益事業に関心の高い方などが登録。

ユーザー登録者以外も…

- 読み物記事「知る・学ぶ」を中心に非登録ユーザーも多く閲覧。
- 月間平均PV 100,000以上。
- LINEやX(旧Twitter)を活用し、定期的に情報発信。

- ボランティア・イベント・セミナー・寄付など幅広い募集情報に加え、**ボランティアの魅力がわかる読み物を多数掲載**しています。
- ボランティアに参加した方の**リアルな体験談、運営する団体の活動レポートを読むことができます。**
- ユーザー登録すると、**体験談の投稿や、サイト上での情報交換、交流会への参加**など、より楽しくVLNを利用いただけます。こうした取組を通じ、ユーザーの**交流の活性化やモチベーション向上**を図っています。

VLNでは、**中高生に向けた情報も積極的に発信しています！**

中高生に向けたVLNの取組(R6年度)

読み物記事の掲載

夏休みや課外活動等において中高生がボランティアをはじめのきっかけとして、また活動を行う際の参考として活用いただけるよう、中高生向けの記事を公開しています。

◆ 中学生・高校生が参加できるボランティア

夏休みにも気軽に参加できるボランティア活動や、活動の探し方を紹介

◆ 学生が気軽に始められるボランティアは？

「パトラン」と「グリーンバードのゴミ拾い」に密着

1人でも友達同士でも気軽に参加できるボランティアや、学校の仲間と始められるボランティアを紹介。

学校・生徒への周知

都の大型イベントでボランティア活動した都立学校の生徒にVLNをPR。また、都立学校、市区町村学校向けにVLNのご案内を配布しました。

生徒とVLNユーザーとの交流

オンライン交流会「VLNカフェ」に都立赤羽北桜高校社会福祉部の皆さんをお招きし、取組紹介やVLNユーザーとの交流を行いました。

奉仕・ボランティア教育研究会の定例会・情報交換会に参加しVLNの取組紹介を行いました。研究会の活動や、部活動の取組の発信にもVLNを活用いただいています！



(<https://www.tokyo-vln.jp/learn/firststep/130479>)



(<https://www.tokyo-vln.jp/learn/firststep/585324>)



オンライン交流会の様子



令和6年度東京都奉仕・ボランティア教育研究会会員

役職等	氏 名	所 属	備 考
会 長	藤 田 豊	東京都立田園調布高等学校	校長
副会長	石 井 久美子	東京都立小山台高等学校	
	吉 田 寿 美	東京都立上野高等学校	統括校長
	富 川 麗 子	東京都立東村山高等学校	統括校長
	神 谷 画 歩	東京都立羽村高等学校	校長
	鯉 渕 健 太	東京都立小松川高等学校	
	櫻 井 滉 輔	東京都立三鷹中等教育学校	
	武 蔵 史 朗	東京都立赤羽北桜高等学校	
	佐々木 彬 人	東京都教職員センター	
	伏 見 明	都立学校教育部特別支援教育課	
	小城原 友 子	東京都立田園調布高等学校	
	舟 木 隼 人	東京都生活文化スポーツ局都民生活部	
	戸 田 未 央	東京都生活文化スポーツ局都民生活部	
	佐々木 亜 弓	東京都生活文化スポーツ局都民生活部	
事務局長	正 木 成 昭	東京都立赤羽北桜高等学校	
会計・監査	板 垣 慶 樹	東京都立荻窪高等学校	
大学関係者	大 東 貢 生	佛教大学社会学部	准教授
	山 田 一 隆	東海大学文理融合学部	教授
外部関係者	川 原 伸 也	(公) つながり創生財団	
	石 川 克 巳	葛飾区ボランティア・地域貢献センター	所長
	榎 本 朝 美	東京ボランティア・市民活動センター	
	中 山 美 嶺	東京ボランティア・市民活動センター	
	有 馬 正 史	認定NPO さわやか青少年センター	理事長

